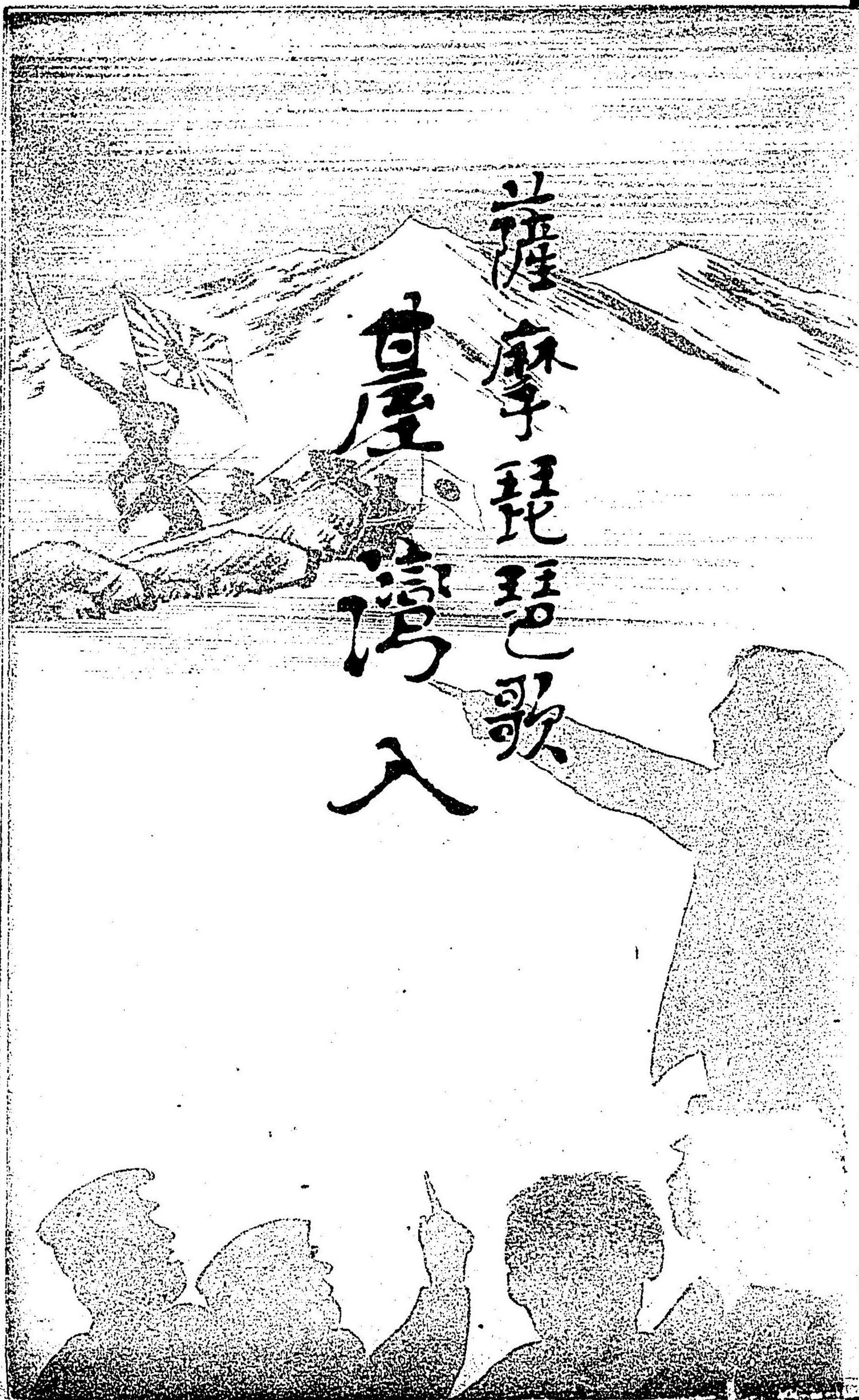


薩摩琵琶歌

自屋灣入



自序

凡そ音樂を琵琶歌を奏せんとするに、まづその歌曲の性質、精神のある所を究め、然してその歌詞に従ひて、悲哀する個所は悲哀、壯快する個所は壯快に曲節に抑揚を附し、聴者をして恰もその境にあふが如く感ぜしめざるべからず。これ琵琶美曲、第一の要義なり。故に吟せんとせば、まづ精神の沈静を計り、熱心に毫も浮華する所を削り去るべし。本書は一字一句、新曲の符号を以て樂譜を附し、聆かばある士の爲めに編成せしものにして、如上の精神を以て曲節に對し、所謂節を生かして奏すべし。節を奏する人は、まづ精神を聚く人は、勢に對し、これ節にのみ拘泥し、精神を没却したればなり。大方諸君、幸に一本を座右に備へて、この注意を忘るるに、業務の餘暇、一曲を奏して、浩然乃氣を養ひ、吟

詠節注意

音の大小高低等、それぐ大小長短の符号を以て示せり。大干とあるは最高音を指すものにして、候に讀者の干を十と定むれば、其の他の音聲を以て強弱を可とす。如何とせれば、強弱は自身の最高音を志く強とせ、身二に強とすべき音聲に困難を有するのみならず、第一に聲に餘裕なく、聴者に於て、聞者一きものなり。中干とは、初め地音に出で、中干六七の干音上げ、亦地に落すものなり。地音とは、三若くは四五位の音にして、歌の曲譜により異る者あり。明れとあるは、勇壯活潑の音を以てすべし。吟者には、概して悲哀する場合、其の心地を以て、強弱を辨ふるを可とす。殷落、即ち強切りは、符號の示す通りに聲を引き、強弱を地に落す。

明治四十一年文月十日

編者識

臺灣入り

皇の御威は四方に輝きて、清國遂に如我を清ひ。臺灣

皇の御威は四方に輝きて、清國遂に如我を清ひ。臺灣

皇の御威は四方に輝きて、清國遂に如我を清ひ。臺灣

皇の御威は四方に輝きて、清國遂に如我を清ひ。臺灣

皇の御威は四方に輝きて、清國遂に如我を清ひ。臺灣

皇の御威は四方に輝きて、清國遂に如我を清ひ。臺灣

皇の御威は四方に輝きて、清國遂に如我を清ひ。臺灣

皇の御威は四方に輝きて、清國遂に如我を清ひ。臺灣

皇の御威は四方に輝きて、清國遂に如我を清ひ。臺灣

皇の御威は四方に輝きて、清國遂に如我を清ひ。臺灣

皇の御威は四方に輝きて、清國遂に如我を清ひ。臺灣

皇の御威は四方に輝きて、清國遂に如我を清ひ。臺灣



とて金枝玉葉の御方なり。三貂角の御上陸幕營あり
其跡に本を削りてたゞる。火を熱くか如き日に、三貂角に
いれぬ險阻を馬にまかせず越へ路ひ。大雨類に降る時
とめればぬきて進まず。士卒之に感傷し、病者
多し

嶺 ともめまよふ 今はおまづ 進軍す、法原の壘にてあり
たる賊兵どもの射せし弾丸は、雨か霰の白きもの、降りし洋くが

かくは砲烟暗く天は蔽ひる雷齊しく落つるに似たり。宮は夫
石を凌いで、雲霞せまら下流あれば、川村少將、児島大佐を
初め、勇みまたる近衛兵我れ先きに奮進し、賊の
本營に突つては、賊兵之に氣は奪われ、右往左往に逃げ
散りて、千に降参するれ敷かれづ大砲小銃の戦利品山
を築かん許りて、勝鬨どらんと、揚げられ、宮に此時、總

明治四十一年七月廿二日印刷
明治四十一年八月一日發行

出版目錄

國の御柱 城山

附送別

附送未山

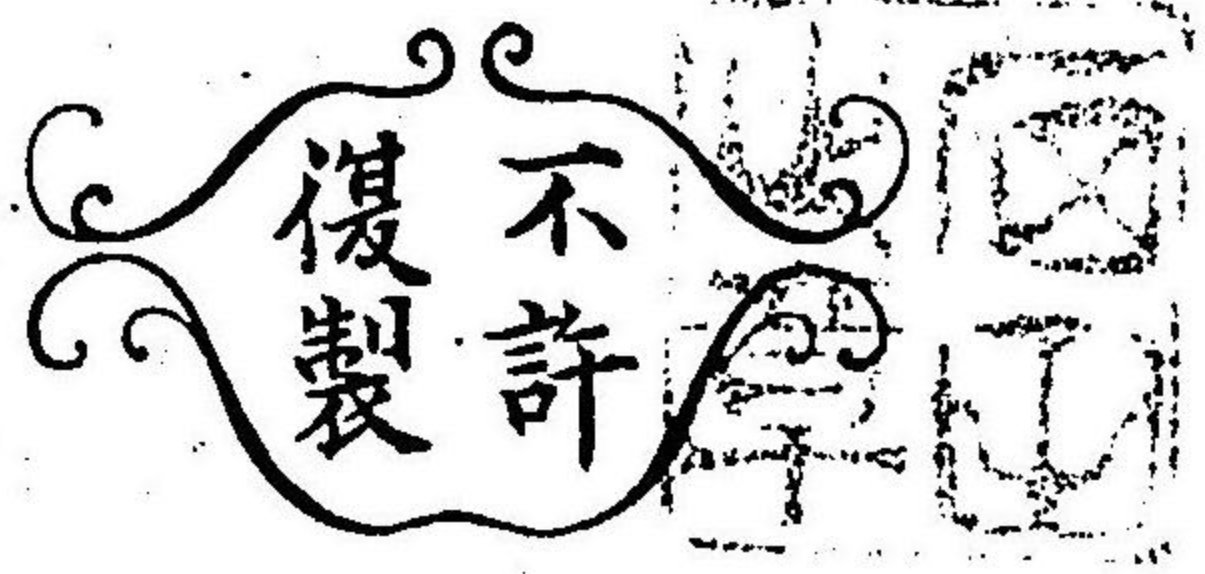
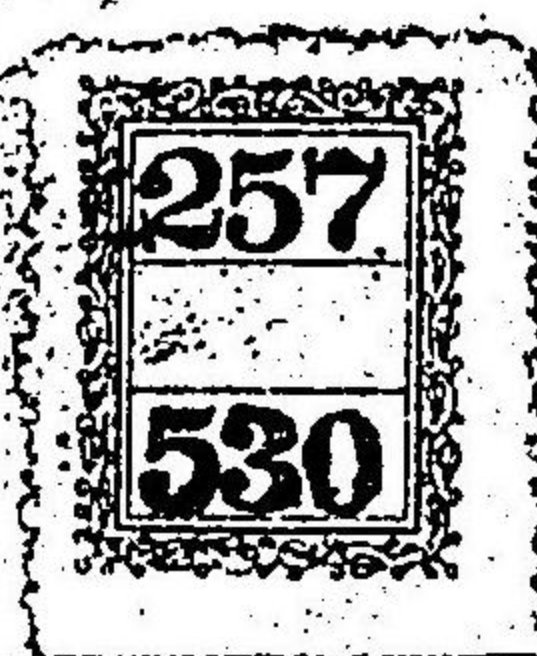
錦の御旗 廣瀬中佐

威海衛 小督

臺灣入 川中嶋

吹雪の敵 喜野落三段

丸 石童丸



正價壹部金七錢

曲譜 西田金起

發行者 西村寅次郎

東京市日本橋區馬喰町三丁目十番地

發行者 鈴木武二郎

東京市神田區駿河臺袋町十一番地

印刷者 須佐權平

東京市神田區駿河臺袋町十一番地

印刷所 東陽堂

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地

發行所 東雲堂

東京市日本橋區馬喰町三丁目十番地

發行所 文友堂

